

書評
菅田正昭 著
『菅田正昭離島論集〈共同体論〉』

評・伊藤好英（藝能学会会長）

本書は大学卒業直後に離島研究を始め、その後五十数年の歳月をかけて「シマ」とは何かを論じ続けてきた著者の集大成ともいえる書である。すべて本誌『しま』に掲載された論稿から選ばれている。

目次を見ると、シマ・スマ・アマ・ナカマ・ウミ・オクレ・オウ・オク・オキ・ヲナリ・ヲウナといった片仮名のことばが多数散りばめられている。これらのことばは、すべて本書におけるキーワードとなるものであるが、それが片仮名なのは、著者がこれらのことばを漢字の意味を抜きにした「音」で捉えようとしていることを示している。そうすることによって、書の中で「シマ」にまつわる日本語が本来の「ことば」の威力を発揮して、一段深いところで互いに関連づけられ、日本列島に生きるわれわれにとつての「シマ」の意味が何たるかを知らせてくれるのである。

一九七一年、朝日ジャーナルが懸賞論文「私にとつての国家」を募集、著者はそれに応募して入選、同年二月の『朝日ジャーナル』に「あえて離島・辺境に立つ」が掲載された。著者はこの直後、論文の趣旨をまさにあえて実践すべく青ヶ

島に渡り、同年五月からの二年九カ月と、九〇年九月からの二年十一カ月、計五年八カ月の歳月を妻子とともにその島で暮すこととなる。本書では、この間の実践的思考を核として、日本という共同体について論じている。

「シマ」とは何か。著者は折口信夫の「島は、自分が持つてゐる国、治めてゐる国」という解釈を敷衍して、その統治の主体を「自分たちが祭祀している神々」であるとし、「シマ」とは「わがカミガミの神意が及ぶ範囲の土地」であると述べる。この「シマ」に、青ヶ島——島の年寄りたちの発音はアウケシマ乃至オウケシマ——の島名にも含まれている「オウ」がカミガミを呼び寄せ、それを天（アマ）と海（アマ）とを包み込んだ「アマ」の霊性が覆う。本書において著者は、「シマ」にこの本来の霊性を取り戻すことを訴え、それが離島振興の本当の意味であることを主張してゆくのである。



菅田正昭離島論集
〈共同体論〉
令和6年1月
みずのわ出版
定価：5,500円(10%税込)